現代日本のエッセイ

天才について

福原麟太郎

和辻哲郎

天才について

現代日本のエッセイ

毎日新聞社

現代日本のエッセイ

天才について

昭和四十七年四月二十五日　印刷
昭和四十七年五月　五　日　発行

定価　一〇〇〇円

著　者　福原麟太郎
編集人　浜田琉司
発行人　朝居正彦
発行所　毎日新聞社

〒一〇〇　東京都千代田区一ッ橋
〒五三〇　大阪市北区堂島上
〒四五〇　名古屋市中村区堀内町
〒八〇二　北九州市小倉区紺屋町

印刷　図書印刷
製本　佐久間製本
（検印省略）

© Rintarō Fukuhara　Printed in Japan 1972

0395-561001-7904

天才について

目次

あの頃のこと
緑の思い　一一
秋の空は澄んで　一四
読書の愉しみ　一八
二塁手　一九
あの頃のこと　二一
信義　二七
気を紛らされること　三〇
猫　三三
詩心の喪失　三七
よき日々の学生　四二
文話　四四
する、しない　四五

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

大人の文学
浪費主義　四九
詩の説　五三
文化の日
古典と人間の知恵　六七
文壇人達　七三
日本の言葉　七四
師弟　七七
鳩山さん　七八
墓標　八〇
富貴の家　八三
十月生れ　八四
犬の話　八六
運動会　八八

芸者の系譜　九〇
中流家庭の幸福　九三
辞書ブーム　九六
礼状一通　九八
老人の日　一〇〇
三四郎日和　一〇三
新聞配達の少年達　一〇四
或る学者のこと　一〇六
文化の日　一〇八

師友

石川林四郎先生のこと　一一三
土田杏村　一一六
初春の御祝儀　一一八
人の一生　一二一

熊谷文　一三四
「鎮れ、鎮れ」　一三七
竹の屋主人　一三〇
「雪」　一三四
能楽　一三六
岡倉天心　一三九
天才について　一四四
隣は何をする人ぞ
野方の里　一四九
六月の季節　一五一
夏の序曲　一五四
初秋　一五六
亥の子　一五九
樽干し場　一六一

男ありけり　一六三
新しい家　一六六
治水　一六九
詩人ホヂソンの死に際して　一七一
トレヴェリアン教授　一七四
紳士・吉田健一　一七七
散歩　一八〇
街　一八二
『嵐が丘』について　一八四
日本の歌人達　一八九
わずかの旅
スペイン　一九三
ハイデルベルヒ　一九八
河　二〇一

塩と下駄　二〇四
京都　二〇八
宇治　二二一
伊豆　二二四
初夏二題　二二九
英京七日　二三一
イギリスの乳離れ　二三三
ロンドンの学校　二三〇
野方閑居の記
或る日曜日　二四一
或る月曜日　二四九
或る金曜日　二五五
或る土曜日　二六二

折り折りの人

七代目　幸四郎　二七一
小山内薫　二七四
戸川秋骨　二七七
菊池　寛　二八〇
安倍能成　二八三
楊　草仙　二八六
竹友藻風　二八九
上田辰之助　二九二
ヘンリー・バーゲン　二九五
杉村楚人冠　二九八
対談　師を語る　三〇一
著者略年譜　三三三

装幀　安彦勝博

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

あの頃のこと

緑の思い

去年の初夏、初めて、寮舎の門を入って、あの丘の中を歩いた。私はもう十年位、女子大に勤めているが、寄宿寮は男子禁制だと思って、一歩も中へ入ったことがなかった。門外にある桜楓寮アパートへ用が出来て、Oさんを訪ねてゆく必要があったときにも、果して行っていいか悪いか、何度も考えた。然るに今度、初めて寮舎の森の中に這入ってゆくと、そこらに一高の生徒が数人立っていたりなどして、私より遙に案内をよく知っているらしいのには驚いた。彼等の寮は反対に女人禁制の筈なのだが、この頃は、どちらも、その制限を廃しているのであろうか。それとも何か特別の用事で入れて貰っていたのであろうか。とにかく私は今日は特に急用で来ているのですから、ごめん下さいというような顔をして、中をつかつか歩いて、一番奥の方の、何とか寮という西洋建を目ざして急いだ。そこで上代先生をつかまえようというのである。

ところが、中途で、大橋先生に出会した。これは地獄に仏で、早速、その禁苑に踏み込んだわけを言上して、上代先生にたのもうとすること（実は借家の件）を大橋先生にも、息せき切ってお願いして、いかにそれが急を要するものであるかを了解していただいた。

そうなると、すこし心が落ちついて来て、その辺りを幾らかゆっくり眺めることが出来た。私の歩いて

いる道はそんなに広くない。且つ曲りくねっていて、丘の上へ上りつつある。そしてまるで青葉のトンネルである。構内は緑に埋もれている。実に爽やかだ。いかにも初夏である。すがすがしく風も吹いてくる。私は立ちどまって、汗をぬぐった。

そこいらを歩いている寮生の姿もちらちら見える。みんな清楚な様子をして、若く美しく健康そうである。寮の入口に立って何か言っている人達もはっきりと丁寧に口をきいていて、決してお転婆ではない。（お転婆という言葉はこの頃の娘さんは知らないだろうと思った。）様子を見ると、寮舎はどれもそう大きくはなく、和風のが多いが、一つ一つ独立した家庭だという話にたがわず各々が個性を持った家らしい。玄関へ訪ねてくる人は客人で、中から応対しているのは、「うちわ」の人という風である。すこし歩いて行くと、琴を弾いているのが聞えているところへ出た。それから一寸道が解らなくなったので、向うから来た生徒に聞いたら、私の訪ねてゆく何とか寮は、もっともっとさきの方らしかった。こりゃとても広いんだなと、すこし驚きながら、すこし不安に、又緑のアーチの道をのぼっていった。英文学にアンドルー・マーヴェルという詩人があって、「緑のかげの緑の思い」という文句で有名だが、そういう気持がしてその言葉を口ずさみ乍ら歩いた。

そしてそのめざす寮へ来ると、これは又本式に洋館なので、又大いに敬意を払った。そして、どうしたら来意を通じることが出来るかしらと思っていたら、人影が見えたので、早速、ごめんなさいと呶鳴った、という次第であった。上代先生にあって、こりゃとても良いところですな、と何度も胸中の思いを吐露した。

どうも、つまらん話を書いて、笑われそうだが、実は、この森の中の寮舎の生活を見て、私はすっかり

感心してしまったのである。何だか、この中に、日本女子大学の重要な鍵がしまってあることを感得した。ここに、学問をする娘さんたちの、よろこびと、礼儀と訓練と家庭と集団とがある、という感じなのである。どうしてもっと早く、ここへ来て女子大を尊敬することを覚えなかったかと私は後悔した。明治三十何年以来、日本の社会に貢献して来た、女子高等教育というものの象徴――女子高等教育というものは、今ひどく普及して来て、目白も目立たなくなったけれども、ここへ来れば、その歴史的な功績をまのあたり示しているような気のする、そういう象徴的存在が、ここにあるんだ、といえば丁度それに当るかと思われるような感激を私は覚えたのであった。

私は手に小さな紙包を、その間中、しょっちゅう持っていた。それは、さっき借家の必要が突然起る前、電車の乗り換えを利用して買ったアメチョコにほかならなかった。私はそれを後生大事に手にのせているのがすこし可笑しかったので、これをして、私の女子大に対する敬意を表せしめたいと思った。そこで思いついたのは、私のうちの娘がこの学校にいた頃、クラスのリーダーをして下さった先生のことである。そのかたが、この中の一つの寮の、寮監か何かでいられることを知っていた。私は、その寮の名を聞いて、こんどは、如何にも、甚だ案内を心得た家を訪ねるように、その玄関をあけて、うやうやしく、アメチョコ献上を申し入れた。先生はまだ学校からお帰りでなかった。

（昭和二十四年）

秋の空は澄んで

去年の秋、もうすい外套を着なければ寒いという位になった頃、病気がなおったばかりの娘をつれて、村山貯水池へ行ったら、非常に喜んで、病院を出て以来、こんな愉快なことはなかったと言った。

池の堤の草の上へ外套をしいて長々と寝そべって、よく澄んだ青空を眺めながら、もっと健康になったら、こんなこともしたい、あそこへも行きたいという話などした。別のところで車座になって、何か飲んだり食べたりしている、見たところ会社員の遠足と思われる一団の人々が、陽気にはしゃいでいるのも不自然ではなかった。

近頃は、西武電車の終点から、お伽電車というのが池のほとりを廻って、上の池と下の池との間へお客を運ぶことになっているらしいが、去年は、歩かなければそこまで行けなかった。私どもは初めは大きな道を伝っていたのだが、いつのまにか森の中に迷い込んで、水辺の小道へ出た。この道は池のすぐ縁のところを、実にうねりくねってどこまでも水から離れずつづいていた。数え切れぬ程細長い入江が岸の緑の雑木林へ喰い入っていて、つい目の前にある向うの水際へ行くのに二百メートル廻らなければならないという屈曲が、可笑しいほど度々出て来た。私どもは何度か、岸の草に一休みし、タバコをすい、柿をむき、パンを食べ、草花をつんだ。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com